もくじ

一、69年度活動報告　キリスト者反戦連合書記局　22
　1 反戦反安保斗争総括　22
　2 反万博斗争中間報告　10
二　吉祥寺数学斗争報告とアピール　キリスト者武蔵野支部　15
三　東大斗争支援　キ反戦戦場支部　20
四　生を求めて(二)　堀方人　23
五　人間そして自由(一)　杉[illegible]　31
六　ある日の親鸞　長野庫　41
七　信濃町救対への カンパの呼びかけ　信濃町救対　49
八　後記　病菜　51

'69年度活動報告

反戦反安保斗争総括

キリスト者反戦連合
書記局

(一)はじめに

東大・日大斗争を頂点とする全国学園斗争の爆発をもって展開された昨年の反戦斗争を受けつぎ、69年における斗いは、まず、一月東大斗争において担われた。東大全共斗の堅いスクラムと、これと連帯し、ともに斗うスクラムを組む日大全共斗及び全国の斗う学友、そして、学園斗争において連帯を示した反戦労働者に対して、明確に権力と癒着した大学当局は、暴力的な弾圧を加えることによって斗いを圧殺しようとした。同時に、東大斗争初期から全共斗に敵対し、妨害活動を行ってきた日共民青は、大学当局の圧殺と呼応し、学内行動隊の役目を果すものとなった。日共民青の正常化攻撃を粉砕せんとして、一九、一〇と連続斗争を行ったにもかかわらず、権力の弾圧によって敗北せざるをえなかった。そして、あの秋父闘ラグビー場における学部集会という茶番劇によって、全共斗運動への圧殺が貫徹していったのである。権力、大学当局、日共民青等の結託した全共斗に対する圧殺は、一・二八、一九における安田訓堂防衛斗争において極に達した。この日、大学当局は、全共斗を最後的につぶすため、全共斗をキャンパスからたたきだすために権力と癒着して行動隊八千を導入した。全国学園斗争における最大の拠点である東大に、斗う学友が結集し、二日間にわたって果敢に斗い抜いた。一方、駒場では、オハ本館にたてこもる駒場共斗の部隊に対し、日共民青の悪らつな攻撃(食料攻め、電気ガス水道のストップ等)が加えられていた。本郷における行動隊と駒場における民青暴力集団が一体となって、大学当局の正常化策動なる斗争圧殺に加担したのである。

一・二八、一九の斗いは、権力との直接的対決にまで到

達した学園斗争の質を示すとともに、大学当局が権力の手先となっていることをも明確に暴露したのである。それまでの学園斗争が、大学当局との対決という段階で停止していたものを、政府・ブルジョアジーとの対決へマスコミによれば社会的問題としての学園紛争)に導き、反戦斗争との結合を見出したのである。すなわち、学園斗争における独自課題(学問とは何か、大学とは何か、教育とは何か、他)を追求していくならば、それが現在的大学の中では絶対に解決しえず、根底的な変革を要求するものであり、反戦斗争の課題である現代社会の変革――国家権力との対決と結びつかざるをえないのである。第二には、武装斗争で敗北主義的に斗う斗争の限界を示し、斗いの止揚されるべき質を明らかにしたのである。行動隊の軍事的対決の斗いは、それが単なるゲバルトである限りは、空しくなってしまう。いかなる形での権力との対決によって勝利しうるかを問い返すことが必要となったのである。第三には、我々の斗いの質を、すなわち、妥協しえぬ根底的な斗いを規定したのである。そして、我々には、もはや退路はなくなった。

一・二八、一九の斗いによって、全国の大学における斗争の激化と、行動隊による弾圧の激化が相互していった。明らかなる大学当局と権力の癒着による斗争圧殺は、一方において授業再開を要求する秩序派を故意に登場せしめ、あたかも学生は待望であるという幻想をまきちらしつつ、正常化への道をつっ走ったのである。

このように、二月から三月にかけての斗いは、京大にみられる斗争の激化、そして、東大・日大にみられる沈滞化をともにふくみつつ、四・二八沖縄反戦デモへと結実していくのである。

単純街頭斗争主義や、政治斗争たれ流し主義を排しつつ、しかも、日和見主義にあちいることなく、学園斗争での課題を真に自分自身のものとして把握し、沖縄斗争を斗い抜く自分でなければならないとの認識に立ち、四・二八斗争を担っていったのである。69年四・二八は、まさに沖縄斗争が政府ブルジョアジーとの直接的対決にその究極的姿があること、そこにしか真の解決を見出しえないことをとらえ返したことによって、日会首相官邸占拠へと向ったのである。反戦部隊の実力斗争への登場をも含めて、69年

における一つの重大な環となりえた。

5月以降開始された東大裁判は、権力と裁判所の癒着を明らかにし、すでに、我々にとっては、ブルジョア的支配の一翼を担う裁判所があてにならないものであることを理解せしめた。

沖縄を中心とした70年核安保を完成せしめる一環としての沖縄返還交渉に訪米する愛知外相阻止斗争に引き続いて、アスパック粉砕斗争へと突入していったのである。東南アジア侵略をうながす日本が、経済援助なる形で、反共日家群の結集をはかるASPACは、アジア開発銀行と相関して、日本のヘゲモニーを確立し、米帝のアジア軍事戦略へと結合していくものであることは明らかな事実である。このような会談が、反対斗争を努めて避けた形で行なわれた。このこと自体、すでにブルジョア秩序を権力が自ら破壊しているこの証左であり、同時に、粉砕斗争に対する暴力的かつ強権的弾圧は、市民大衆の目に権力の実体を見せつけたのである。

(2) 六・一五～十一・二六・一七斗争

六・一五反戦反安保全国統一行動は、東京において日比谷野音に約六万人の斗う労働者・学生・市民を集め圧倒的にかちとられた。社共の古ぼけた革新の虚偽を見抜き、権力との対決へと目的意識的に高まった部分の結集をかちとったことは、結集した部分にさまざまな意識の分岐があったことを認めてもなお、意義あるものであった。さらには全国全共斗を形成していく全都全共斗のスクラムの巨大さには注目しなければならない。およそ二万の学生部隊の結集は 強力な弾圧にもかかわらず、未だにその力を失わない全共斗の力を見せつけたのである。

しかしながら、我々が総括しなければならないのは、キリスト者なる集団が、反戦反安保斗争の中へ登場したことである。「生」の問題を自己のものとして受けとめ、いかにして現代社会において自己の存在を賭いていくかを向い返す中から反戦斗争にその解決を見出さんとする人々の登場。これは、単なる政治経済主義にかたよることなく、むしろ、政治を自己の存在にまで次元を押し上げたと評価しうるだろう。政治諸潮流が、人間存在の基盤にまでその自己の源泉を見い出さねばならない時がきたのだ。左翼戦線の一翼を担うものとして、同時に、それらを領導していくものとして登場したのだ。およそ三百名のキリスト者の部隊は、オニに力トリックとプロテスタント諸派の共闘という点でさらに高く位置づけられるだろう。まさに、このような外面的分離を捨象し斗うキリスト者の結集をはかることが今後の大きな課題であろう。

我々キリスト者反戦連合は、斗いを現代社会の中に、自己の生存をかけてとらえ、一切の政治至上主義を排し、キリスト者の戦列を打ち固めることを追求せんとし、六・一五統一行動の中から結成され、常に、キリスト者の戦列を領導するものとして自己を確認したのである。キ共斗なる形で(実質的には実行委員会形式)かちとられていった6・15は、共斗における問題点(たとえば結集軸のあいまいさや個々の団体の独自性・自律性の欠落)をのこしつつ、一応の成功をもたらしたのである。

このような斗いの昂揚過程の中で、キリスト者反戦連合の位置は重要なものとなっていった。すなわち、斗うキリスト者の結集と独自の運動方針の提起である。

17:20靖国法案粉砕中央集会への介入において、初めてキ反戦の旗が登場したのである。信仰の自由を侵す靖国法案反対なる形で提起された7・20集会に対して、靖国法案は、権力による市民社会のイデオロギー的再編であり、国家暴力装置の精神的支柱となるものであるとして介入したのである。靖国法案は、権力による帝国主義的再編の一翼を担うものであって、単に信教の自由を侵すというような、狭い宗教的立場ではなくして、社会全体の中でとらえていかねばならないのである。社民的戸村一飯坂ラインに対して鋭い批判を行いつつ、集会に介入し、戦斗的デモンストレーションをかちとったのである。しかしながら、我々の戦列に大衆的な結集をかちとるまでには至らず、日常活動の微力さが総括された。

夏期において開かれた日本カトリック学生連盟全国大会に、キリスト者反戦連合は、全国化の組織課題をもって参加した。しかし、日本学連全国レベルでの問題意識が希薄であるがゆえに、大衆的な組織化は出来ず、一部の有志にとどまった。この点において、斗うキリスト者の全国的組織化が、重大な任務として確認された。全国的組織化なくして、大衆

敵情宣は不可能である。なお、全国大会において、日本学連は解体されたことを報告しておかねばならないだろう。

8月における書記局方針の決定は、秋期の斗争を展望する上で重大な意味をもっている。まず第一に現代キリスト教会批判にもとづく教会斗争の提起をあげることができよう。現代の教会が、社会の中で果している犯罪性ーすなわち、社会的問題から目をそらし、ひたすら自己の安寧の中にとじこもり、ブルジョアイデオロギーの補完物と化していることを真にキリストという次元で、自己の生という次元で考えることをアピールしたのである。それゆえ、単なる教会の民主化ではなくして、全社会的次元の中で、教会のあり方、自己のあり方を根底的に問い返すことを必要としたのである。そして、そのような次元から政治課題の追求へと続き、第二の政治方針の提起がなされたのである。10・21国際反戦デーから11月佐藤訪米阻止へと向けての秋期斗争方針の提起は、教会斗争という個別斗争にとどまりえない我々の斗いを、果敢に明らかにしたのである。

九月初めに、吉祥寺教会で起った処分問題に、キ反戦として積極的に支援し、同志を獲得しつつ、教会のあり方に対する根底的な問いかけを開始した。単に教会内に立て看を立てたことに対して行なわれた処分は、まさに主任司祭の私物化した教会のあり方、信者の自目性をあばきだしたのである。我々は教会役員をはじめとするプロテスタント教会指導者に斗いをいどんだのである。この吉祥寺教会斗争は、腐敗した現代教会に、大いなる脅威を与えた。各教会は、以前にもまして、みじめな教会セクショナリズムを露わにし、自分の教会だけはという形で、くさいものにフタをしはじめたのである。この点で、吉祥寺教会斗争は大きな意味をもっている。現在においても、ビラ入れ、討論、そして研究会といった形でねばり強く斗っている。さらに多くの教会で、問題提起がなされることが、今緊急に要請されている。

佐藤訪米をむかえての秋期反戦反安保斗争は、9月5日全国全共斗連合結成を皮切りに、9・30日大斗争一周年奪還斗争においてはじめての実力斗争を

斗った。

10・10全国統一行動は、高まる反戦反安保斗争の中で六万人の圧倒的結集の中でかちとられていった。我々キリスト者の部隊は、斗う宗教者の部隊をまきこみ五百人の結集をかちとった。しかし、準備会の不足により内部討論が徹底化されえず、同時に情宣不足と組織化の決定的な遅れによって、集会において、初めて結集したものになってしまったのである。それゆえ、五百人の大衆は未組織なまま残されてしまったのである。このような脆弱性をもつつも、大衆的な集会をかちとり、戦斗的なデモを貫徹したことは評価されるであろう。なお、この日一名が不当逮捕されたが、このことにより、統一敵対を組織したことも評価しうる。

10・10以後、10・21国際反戦デーに向けて、十分な内部討論を重ねつつ、キリスト者反戦連合としての独自の取り組みを準備していった。キ反戦として単独で斗うがゆえに、内部討論を十分に行うことができたし、組織的活動をなしえた。(これは、組織化が我々の早急の重要任務であることを裏付けている)このような準備のもとに、新宿において果敢に

我々は斗うことを貫徹した。村動隊の圧倒的な弾圧を各所で打ち破り、新宿を我々の手に奪還することもたびたびあった。軍事的には、一定敗北の総括を出さねばならないが、新宿という街の村能をマヒさせることによってしか、自らの権力を維持しえぬブルジョア秩序を暴露したことは、評価しなければならない。まさに、戒厳令的状況を、ブルジョアジー自らが創り出したのである。

10・21において大量の逮捕者を出しつつも、戦斗的学生労働者市民は、佐藤訪米阻止斗争へと結集してきた。11・13銀座解放斗争によって訪米阻止斗争は開始された。キリスト者反戦連合は、11・16佐藤訪米阻止集会ー蒲田実力斗争を最大のヤマ場としてとりくみを用意していった。11月佐藤訪米阻止斗争は、今までの反戦反安保斗争の大きな集約点であり、同時に、70年斗争を展望する重大な斗いである。それゆえに、実力斗争という次元で積極的にとりくんだのである。しかしながら、ゲリラ戦の不徹底さと武器補給の不完全、そして自警団の登場により、またもや軍事的な敗北を喫したのである。

10・21、11月斗争を通じて、我々は、実力斗争の総括を行うと同時に、与えられた状況に参加するだけではなく、自らの立場にもとづき、自らが状況を創り出さねばならないことを痛感したのである。そして、その中において、独自の斗い方をさぐらねばならないと総括した。

69年度における総括的な斗争として、12・24反戦クリスマスを、我々は提起した。それは、まさに、自らを斗争の担い手として自覚し、我々が独自に行うことによって、キリスト者の戦うスクラムを強化し、反戦斗争の前面に登場することを意味した。クリスマスを反戦で斗うことの意義は、形骸化され、商業化されたクリスマスを否定し、キリスト者に対して、キリストは一体いかなるものかと問題提起すると同時に、全社会的に、キリスト者が斗うことを明らかにしたのである。清水谷公園での集会と日比谷公園までのデモは、二百人の部隊をもって貫徹し、日比谷公園でのべ平連のキャンドルデモに介入した。静かな祈りの日的イメージをもつべ平連の集会は、まさにクリスマスとは一体何かを問うことなく、あまり騒ぎ的抗議をかもしだし、我々の鋭い批判の前に混乱していったのである。この集会において、我々は斗う同志諸君に呼びかけ、五百名規模で、東京駅までの戦斗的デモをかちとったのである。まず第一に、我々が総括しなければならないことは、独自の斗争を組んで貫徹したことであり、第二に、準備不足の克服、第三には、組織化の遅れである。しかしながら、キリスト者としての斗う部隊の登場は70年へ向けての活動にあたり、重大な意義をもたらすであろう。

70年斗争にあたって、キリスト者反戦連合は、常に斗うキリスト者の先頭に立ち、独自の方針を提起しつつ、斗い抜くことを表明する。そして、現在の組織化の立ち遅れを克服しつつ、新たなしかも大きな力強い潮流を創り出すために斗い抜くであろう。

(三)70年春にむけて

六九年後半の否定的状況から、我々は七〇年代に突入しなければならない。しかしながら関西地域における七〇年万国博は着々と進められ、事態は今まで進められてきた斗争の上に立って、これに取り組む必要がある。すなわち一二・二四反戦クリスマスにて出発、万博反斗争と反万博斗争の質を、再び各教会に還元していくと同時に、万博に対して我々の斗いをつきつけねばならない。

一・一五には大阪千里丘陵において新左翼諸党派を含んだ反万博の集会・デモが予定されている。我々はこの斗争、すなわち理論集会に積極的に取り組み、政府権力そしてこれを補完していく幻想性を暴露していかねばならない。

そして、その後、二・一一紀元節の日に、我々の反戦日斗争・反万博斗争の集約点として独自の斗争を組んでいく必要があるだろう。特に今まで宗平協路線の中で、何ら宗教者の自己保身性を打ち破ることなかったキリスト者の集団に対して我々は厳しい問題提起をつきつけ、そこに我々が立ち取ってきた反万博斗争を提出していくのである。体制イデオロギー再編の危機的状況を彼らの前につきつけ、同時に我々斗うキリスト者の形成をみずからの基盤を検証する中に行い、それを斗争へと転化せねばならないのだ。今後、組織化を教会・地区にて行いつつ、我々の斗争の質をより一層深めねばならないであろう。

反万博斗争中間報告

七〇年を通して大阪千里丘陵で開催される日本万国博覧会は、既に大半が完成し、昼夜突貫の工事が最後の仕上げを目指して続けられている。しかしながら、この「進歩と調和」とを基本テーマとした日本万国博も、実はそれが現体制における矛盾を隠蔽し、新たなる国家秩序の再編にみあった体制イデオロギーの形成軸そのものなのである。しかもそれが万博企業に典型される人民抑圧の上に立った独占資本の強権・ファシズムを中小企業を独占の系列下に再編成しつつ、外国資本への対抗という名目による寡占化が進められ、物価上昇・都市過密化・農村過疎化を中小企業の倒産・反通勤闘争・企業公害等大民抑圧体制がより一層強化され、資本の論理が下部末端まで推し進められていく。その一大メルクマールとして七〇年なる年に、関西北域に万博が登場するのである。しかも企業にとってはこれに参加せねばみすみすその生命が危いといったいわば死活をかけた取組みをせざるを得ないのである。対外的にはベトナム戦争を軸として東南アジアから一定程度後退しつつある対米従属日主義にかわって、新たなるアジアの盟主として華々しく登場しつつある「大日」日本のイメージを、この万博において余すことなく発揮しようという政府権力の意図が露骨なまでに出ているではないか。しかも、中共・北朝鮮は参加させないという日米軍事同盟の持を忠実に実践しつつ、「人類の進歩と調和」なる一大幻想を謳いあげることによって、アジアの救世主日本という印象を与えんとしている。事実、新聞・ラジオ・テレビ等全てのマスコミを総動員し、エキスポ七〇の夢は日増しに高まっていく。そしてかもその万博自体が政府権力によって再意された系、従って民の意図など全く無視した一方的な儀式であり、内においては「警備監察に関する特別規則」なる禁令をしくことによって観客はただおとなしく歩き目で解するものとされ、

外においては公害・水害・事故・汚職の乱れ、批判無かりスにする業者側の責任、インフレ等いわゆる万博公害を生み出している。会場建設並びに関連交通網関係には巨額の金を投資しながら、地域住民の生活に対しては何の処置もとられないという手厚さは、一体どう解釈したらよいのであろうか。建設労働者も、農村過疎化の上に立った農村出稼ぎ労働で、しかも手取賃金の中間搾取を経、昼夜突貫の過重労働でえくの労働災害を出している。一体このような万博が「人類の進歩と調和」なる美名の下に、実は大いなる産業の祭典として登場するという事実は、我々の搾取の対象でなくて何であろうか。

ところが、日本のキリスト教会、とりわけ日本基督教団員が日本カトリック教会は、その万博に対して万博キリスト教館を設置することによって積極的に参加しているのである。何故そのテーマが「目ざす一人間の発見」として万博に批判的に参加するといったとしても、実質的に、万博を催者側の一員として使嗾しているという事実を敢へて試にしないかない。むしろキリスト教会自体が体制イデオロギーの補完物として作用していくのであるまいか。

が宗教幻想として現実認識を欠落させたり言辞外の産物でもないのである。

従って、我々の反万博斗争は、体制の矛盾の一大表出たる万博を、万博キリスト教館なるキリスト教会の矛盾の表出を媒介として始められた。

六九年八月に大阪にて開かれた「反戦の日」の万国博」に我々は東京から若干名を派遣し、とりわけそこにおけるキリスト教館にて情宣活動を展開した。ベ平連主催による万博は、七〇年万博との堅持性を欠いたものでともかく我々の集会をというかたちで、下良新宿地下広場運動の延長上に位置づけられるのであるが、未定的に万博への矛盾が欠けていた。がともあれ、反万博を志向するキリスト者グループ百名余は八月一〇日大阪クリスチャンセンターへのデモを行ったのであるが、センター当局者は何と我々に向かって警官隊を導入したのであった。且後文書に暴露されていく教会当局者の管理者性は、我々の目の前に暴露的なものとして立ちはだかるのである。反万博において一定的果たした反万博グループは六・二一日において日本基督教団三役との団交へと移っていく。我々は、九・一団交に参加していい

吉祥寺教会斗争経過報告！

九・七(日)　吉祥寺教会に米倉氏と共反成書記局員二名が来見。

九・八(月)　米倉、役式により武蔵野共反成立、斗争宣言のアジビラ作製。吉祥寺教会青年会室を拠、アジビラ塗布、助任司祭南村神父より厳重抗議有り。

九・九(火)　朝ゲ所立て看作製前掲、助任司祭南村、抗議あり。物別れにおわる。午後二時頃ルルドのマリア像の前に立て看を立てる。その後、レジオマリエが祈る。内容「聖国会聖粉砕、万博キリスト教御粉砕、キリスト者の戦争責任追求！」教会の後、前記の二名が主任司祭に抗議のところ聞せずとの返答。午後五時教会員数名によってアジビラがはがされる。午後十一時頃撤去された立て看をもとの場所に再度立てる。主任司祭それを目の前で破壊、抗議すると「アクマはきれ」の返答。

九・十(月)　役式、米倉西谷に転出証明が郵送されてくる。一般様式の転出証明に転出先以外は全て記入され、横に「石の者は本日より当教会員でないことを証する」の走り書きあり。

九・十四(日)　朝九時共反成書記局員、共斗その他十数名により公開質問状役式の立て看を立てる。内容①二名の処分理由を問う、②教会内の政治活動の禁止理由を問う③看板不在の教会マンションを問う。七時半ミサ終了後、五十名以上の信者が立て看の前にあつまりグループにより討論がなされる。二時頃第一名、他教人の役員により強制的に立て看を撤去。教会委員討論会を提案。信者三十名が出席、教会委員に次の返答を聖田神父がする様に依頼①処分の理由を問う②教会内の表現方法を問う③ミサ日に討論会を行なうこと。主任司祭は聖霊降臨の後、帰京を理由に他の司祭が阻止する。

九・二十(日)　早朝、教会立くの井ノ頭公園内に置いてあった立て看をボーイがもち去る。内容「本日公開討論会し午前九時共反成四名が教会

そのような中で、我々は、

[illegible]るこの方法参加の決定は、NCCより声のかかることが、ほぼ初者に全く秘密裡に、専制的なかたちで行なわれてしまった。カトリック大阪教区のいわば総務の主たる司教へ理事はその旨、申し上げ了承を得ていらっしゃいました。田日はあたかも自分の小屋でも建てるかの如く、方博参加を決定してしまったのである。高槻のヒエラルキーと幻想性を、プロテスタント諸教会以上に備えもつ日本カトリック教会は、彼ら自身の組織拡大とエキュメニズムなる甘い幻想でもって方博キ教館建設のヘゲモニー掌握によってはかっていったのである。しかもその内側においてはほとんどの信徒が方博キ館の意義すら知らないまま賛金提出させられている。その故、カトリック内における我々の反方博斗争は、方博キ館の存在そのものを暴露していき、それを教会ヒエラルキーの矛盾の中に位置づけていくことによって組まれていくことになった。

従って夏のカトリック日本基督連盟全国大会以前、特に東京地区における情宣を多くしてきた。そしてそのことにおける教会斗争の中で反方博が大きなモメントとなっているのである。我々の提起してきた教会斗争は、反戦反安保反方博の課題、いわば理念の矛盾で、今までそれを意識し、問題としてきた者を互に結びつけてきたカトリック教会に対してつきつけていく斗いであった。たとえば吉祥寺教会で起きた斗争も、教会信徒の宗教幻想性が主任司祭の独裁体制と補完してきた中に、すなわち反戦のための立場と、ボーイたちの信徒を追放処分に処していった教会を告発するところに始った。そして我々はその斗争の中が単に教会内の問題ではなく、我々の反戦斗争の中で重大な意味を持つことから、支援と情宣を行い、たとえば教会問題研究会といったカトリックの各層の討論の場を設定していった。その間、世田谷教会にても斗争が組まれたが、教会内の内部結束が保たれ幻想性が拡大再生産されてきたが故に、現在で定期総会問題に面している。

なるほどプロテスタント諸教会に比べカトリック側の反方博斗争は取組が遅れているが今後プロテスタント側の斗争で獲得した角度をカトリックに移さねばならない。一二・二四の反戦クリスマスにおいて、

くことによって、教団保住学討論会の欺瞞性を暴露し、特に教団イデオローグなる北森嘉蔵の教育を告発していった。翌朝までそうした二日目には、最終的に教団総討議による教団臨時総会開催の確約をかち取っていったのであった。我々は、このカ、一の成果をふまえ、平安二ヶ教団臨時総会において我々のヘゲモニーを貫徹し、単なる反方博キ館運動から明確な反方博斗争への媒介として位置づけることを確認した。既に教団自体がその矛盾過程そのものに直面し、内部からはげかけられ、表の戦争責任告白と方博キ館建設とのギャップを乗り越えるべく教団解体のち向性をもった斗いへと移りつつあった。

九月一一日、我々は教団本五回臨時学討論会へ介入し、隔離問題を討論するなかで再度教団自体の欺瞞性を暴露していった。九月二六日には教団東京教区学置委員会へ介入し教区臨時総会への展望をひき招いていった。その時点においては、いわゆる反博牧師グループとの完全なる共同行動であったのが、その後、ボーイ自身の存立基盤を吟味していく中から斗争を相築せねばならないという視点に立って、一定の緊張性を持たせた関係へと移っていく。

以上のような過程を経ることによって、我々は一九、二〇の日本基督教団東京教区臨時総会に介入したのであるが、教区側はこれを流会することによって先の方博賛成決議を生き永らえさせようとした。我々はそのような当局側の策動を排除し、一一・二五、二六の教団臨時総会に取り組み、そこにおいて先の教団一五回総会の方博賛成決議の無効性を談き、NCCを初めとする方博キ館推進グループ・東神大教授会の許理政策を大衆的に明らかにしていった。そして、方博キ館反対から方博反対へと運動へと結ばっていった。飯田長の発言をふまえ、教団の成立過程を向う中で理念的には教団解体を反方博斗争を担う中から志向せねばならないことを確認していった。それは単に日本基督教団のみの問題ではなく、日本のキリスト教会全体を向い直さねばならないのである。特に日本カトリック教会は現在教団側が動揺している中でバチカン市国の圧倒的な援助の下で方博キ館に関与している。しかもそのプロデューサー建築家丹下の発言によれば、方博キ館は宗教館ではなく芸術館であるといい、当初のテーマの無内容性・欺瞞性はますます暴露されていく。

10・12 (日) 再度自粛を申し出る。一、処分白紙撤回、二、向田神父の公式の自己批判 三、教会委員総辞職 四、万博キリスト教館建設阻止

10・16 (月) 万博研究会（吉祥寺教会にて）

10・18 (日) 吉祥寺教会斗争準備会、ミサのお知らせの用、万博研究会の事を説明するという事を確認。

10・19 (月) ビラ入れ

10・23 (水) 万博研究会、

10・26 (日) ビラ入れを行ない、その後万博研究会を吉祥寺教会で行なうという事を、ミサのお知らせの時言おうとした所、教会委員に実力で排除され、お聖堂の外につまみ出される。向田神父は立て看と含めた教会内での政治活動はトッエトドけはじとの発言をする。もちろん万博研はもってのほか……。

10・30 (月) 万博研究会、及び第二回目の青年問題対策委員との予備交渉。第一回と全く同じ様に処分を撤処分者と主任司祭の間で収拾しようとする動きと、現在の教会管理

機構に組み込まれた全ての責任者が、それぞれの責任を明確にした上で、自己批判を行ない処分を白紙撤回するという委員とが対立し平行線をたどる。

11・2 (日) ファリザイ人に関する聖書の言葉を引用したステッカーとビラを持って吉祥寺教会に集合。ステッカーはりを行なって、立て看に対して、それを撤去するよう口命令が下されたが無視する。ミサ終了後のお知らせの用、米倉氏が信者集会開催を呼びかけようとしたが、教会委員を含む教会員と教者が実力でそれを阻止する。聖堂の入り口で激しい討論が行なわれる。

11・3 (月) 教会問題研究会

11・6 (水) 万博問題研究会

11・9 (日) 先週に引きつづき再度、ミサの後お知らせの用に、信者集会開催を呼びかけようとしたが、教会の切崩しやり方にかわされてしまう。聖堂前でアジテーション演説を行ないビラをくばるが、信者の加入ゼロ帰ってしまった。前日、これまで補教的に

の中に搬入しようとするとボーイスカウトハ名名が暴力的にもちろん阻止。彼らは中反戦の者は教会の壁に連れて行って引きずり回す。現場を撮影していたのカメラのフイルムを教主、カメラも破壊におとされた。中反戦が厳重に抗ぎしたところ、当教会の一員として君達の行為は許されない故、この場に出たを追放九時半のミサ終了後、主任司祭は二人の処分に関して釈明と称して次の様なことを言う。二名はマリア像の前に政治に関する立て看を立て、北方のマリアに対する冒涜を著しく傷つけたプロテスタント的行為は絶対許せるものではない。三千名の善良なる信者を半の衣をかぶった狼から救う為に二名に転出証明を出した。主任司祭として二名の霊的指導はもはやできかねるので、しかるべき指導者のもとで彼らなりの信仰を追求すべく出した転出証明であるから処分ではない。本件に関しては既に司教館へも報告した。も

と二名が不満であるならば司教様の所に行け。信者の皆さんは眠られているビラを女積極的に拒絶するか若しくは下さい。」十時半ミサ後、ビラをまいている米倉氏にボーイによる暴力的圧殺が行なわれる。午後十一時非公式フリートーキング（前夜）。初めに報告として二人に六名の教会委員が向う。「主任司祭の処分はあくまで正しい。しかし、二名が今回の非を認め今後一切同様のことをしない旨を書面に約束するならば、二名の転出証明は撤回する。」「アクマ」発言も正当だと言う。

・二ハコングレ有志の方針提起に基いて信者集会が開催される。十一時、古軌田教会員のもとに開かれる。「政治と信仰」「二人の処分問題についての見解」などの討論、コングレの集会、立て看二枚作り出される。万博によって会場は大混乱、収拾裂、

・五　教会委員が対策委員会代表として信濃町にて、中反戦3名と第一回予備交渉を行った。平行線をたどったまま終る。

我々は教団臨時総会で獲得した地平と、カトリック教会与党で獲得した地平とが同一の基盤に立つた。それ故、反万博ヨ党はキリスト教徒を軸としたキリスト教会全体に対する反乱を中から七〇年万博をその射程の中に入れる。エキュメニズムなる偽りの統一を退け、我々が現在のキリスト教会を歴史的・社会的に検証し、教会の内と外といわば二元論を克服し、社会の中のキリスト者、少くともその匿名性と「庶民性」との葛藤を乗り越えるべく、我々の闘争を開始しようではないか。

その後、カトリックにおいては東京教区大会が、バチカン公会議を模して行われることになっているが、そこに反戦反安保反万博の課題を中に提起さるべきならない。と同時に各小教区において理論的にもとづいた反戦闘争を繰り拡げていく必要があるだろう。それによって始めてエキュメニズムを乗り越える運動の基盤をかたちづくることが可能だから。

神学研究会のお知らせ

時：毎週火曜日 6:30～

所：信濃町真生会館にて

連絡は 真生会館内神学研究会まで
Tel 353-0401

吉祥寺教会斗争報告とアピール

キリスト者反戦連合武蔵野支部

烽火第二号に於いて、書記局の方より若干の斗争報告がありました。第三号発刊にあたり、それに加え、吉祥寺教会斗争を担ってきた我々、キリスト者反戦連合武蔵野支部より斗争報告と、全日の斗うキリスト者の同志諸君に連帯のアピールを送りたいと考えます。

吉祥寺教会斗争の発端である処分問題には、政教分離の大原則、神父独裁という温床があり、それに青年会の活動低下が加わり、青年会はあたりさわりのない同好会へとおとしめられていました。そして意識的青年が、斗争宣言を主旨とするビラを貼ると、「美観を妨げる」という矮少化された理由により破りさられました。この様な情況下にあって、我々は組織化された、大衆をまきこんだ反戦運動の必要性を感じキリスト者反戦連合武蔵野支部を結成し、一、万博キリスト教館阻止一、靖国法案粉砕一、キリスト者の戦争責任追求をスローガンとする立て看板を教会内に立て、活動を開始しはじめました。それに対する教会側の反応は実に敏速なものでした。立て看をボーイスカウト、果ては神父自身がメチャメチャにし抗ぎした同志に対して、その日のうちに転出証明を郵送するという暴挙にまででました。それ以後、ミサの時には「二匹の狼を羊の群れから追い出した」と説明し、カトリック新聞で教会委員会が「全面的に主任司祭の処分を支持する」という長文をのせました。それ以後も教会刷新のための討論会を開こうとする要求すら一切拒否し、教会内の諸問題へ婦人会、ヨゼフ会等々）に臨時総会を開かせ、キ反戦の委員を開くことすらなくして、のっぺらぼうにただ「教会委員会及び主任司祭の処置を全面的に支持する」とのほんの二、三行の決ぎを出させました。

こうした吉祥寺教会当局のバカバカしい弾圧は、自分自身の矛盾を自ら暴露するという我々に好都合

この斗争を荷って立った坪井氏の家に教会委員五、六名が押しかけ、その母親を含めた家族に恫喝を加えた。力ト新に坪井氏の「我らの主張」と教会側の「教会の今日的課題」が掲載される。

11・16(日)ビラ入れ、ヒゼフ会声明を発表「教会側の弟動を全て支持する」コシグレ声明を発表「行動には疑問を感ずる」が彼らの提起した問題は重要」との声明文

11・23(日)ビラ入れ、

11・29(土)ザー介入を最終的に決定

11・30(日)ザー介入、用意ドウ看板をステッカーも取れない程。玄関に「教会商売勝利」「万博キ教館粉砕」のステッカーをはる。カンパ活動開始、教会ナショナリスト十数人が我々の前に立ちはだかり、実力で我々を教会外に押し出そうとする。広報館内でやっていた我々の活動は十一時にはその外に押し出される。こうとなっていた。長富氏ら数人が到着、アジ演説を始める。広報館内は騒然。レジオのおばさんが「明かったからやめてくれ」という意見、十二時すぎに活動を停止、義和集会。

12・7(日)ビラ入れ、

12・14(日)「何をなすべきか」カレを売る。反戦クリスマスのアジ・ビラを配る。

12・16(火)七種粥の時のパーティーに介入。クリスマスとはこんなものではなく、十字架を背負ったキリストを向える我々は、もっと現実に厳しくあらねばならない、とビラ撒きすかるパーティーに介入した。8さんの抵抗等いろいろな反応あり。

12・21(日)反戦クリスマスのアジビラを配る。次々周の約束に基いて、教会員有志との会談を持つはずであったが、誰も来ないので中止。

12・24 反戦クリスマス、清水谷公園、イグナチオ教会、日カ館で集会、キリスト者百人その他五百人程度の部隊でデモ、集会を貫徹、

な反作用を生みました。しかし、我々は、こういう教会当局のバカバカしい弾圧に対し、ただアンチとして斗争を組んできたのではありません。もしそうであるとするならば、せいぜい教会改良斗争、要求斗争、しかも吉祥寺教会という個別的なものに対する、個別的な斗い以上のものではありません。要すれば、主任司祭の個人攻撃に終ってしまったことでしょう。しかし、我々は断固として、そのようなギマン的調和をはね一け、処分問題がおきた過程にまでさかのぼり、すなわち具体的には一番最初の立て看の内容性を深めていく形で斗争を組んでいかねばなりません。ですから教会当局の自痴的非現実性を暴露していくことは汗通的なものであって、そんなところで、我々は展望をもつことはできない。あくまでも現実と教会のかかわり合いを求める方向で大衆的に組織的に運動を展開しなければならないし、大衆に対するギマン的な操作をすることによっては絶体に斗争を組めないということを確認し、強固な斗争組織をきずき一つ、その斗争組織自体を全人民に向けて解放していく作業を展開しようと努めてきました。そのために、我々は毎週日曜日、教会内における討論集会を提起してきたし、ビラ入れ・立て看立てをその後も行ない、具体的には万日博研究会を行ないながら、現実をいかにして我々の手に取りもどすべきかを具体的に研究してきました。そしてそれは教会ムードに一致したオダヤカナ雰囲気の組織を生み出そうとしたのではなく、否応なく教会が現実の社会、政治、経済等々にまきこまれ存在しているし、教会がそのような現実との関わりをもとうとしないで布教なんてものに乗り出したとき果す道化師的役割を充分に示している万日博キリスト教館を考察しようという意図でありました。だからこそ11・30バザーにおいては、我々の斗争報告を、全てのバザーをたのしんでいる人々に対してぶっつけ、現実を切り離して楽しもうとするケケラワイ小市民的意識に挑戦していったのです。

も、とも万日博研究会は現在、主任司祭の徹底した弾圧政策により、吉祥寺教会内で行なっていくことが不可能になっています。しかし、我々はこの間武蔵野支部の村関誌「何をなすべきか」を発行し、更に大衆的に、ラジカルに斗争を進めてゆく展望をきり開いてきました。（第一号は30部、第二号は百部売り切れ。第三号1月11日に発行。多くの同志諸君！カンパをお願いいたします。）

さて、我々は反戦武蔵野支部が吉祥寺教会内で運動を組んでいくとき、教会当局のカベを支える思想として「政教分離の大原則」がありました。それに関して、若干述べたいと考えます。我々は人間性全体の解放を目指すものであり、それに対して「政教分離の大原則」は具体的には敵対物として作用しているのだということ。さらにそれが反宗教的性格をもつものだということを確信するに至りました。

我々の斗争に対する二名追放という処分は「教会内に政治的問題を持ち込もうとし個人的な静かな祈りの場である教会を混乱におとしこもうとした」という、主任司祭の我々に対する正しい認識のもとになされたのだと考えます。そこにおいては、教会と政治の問題で処理される世界が並列的に、お互いに関係することなく存在しております。ですから教会外の世界で動きまわって疲れた人が、教会の門をくぐって憩いの一時を過し、そうしては、又、外の世界に戻っていくというわけです。この様に体制－現代資本主義社会の矛盾をおおいかくす装置としての教会こそ真の教会であるなどというとんでもない固定観念にとらわれているのだと明確にわかるわけです。たしかに、その様な装置としての教会であるならば、丁度、ノイローゼをなおす精神病院の一種として教会をみていることになります。もっとも、ここには聖体とか、神父さんのキレイな説教とか、家族的フンイキなんていう、他の精神病院には見られないものもあるわけですが、こういう考え方からは我々の切り拓こうとする斗争を否定してくるのは当然だと思います。又、こういう考え方から導きだされる靖国神社法案反対の声は、新しく国家主義で組織されるカッコイイ精神病院がソバに立つと、患者が来なくなるから困るという、ガリガリエゴイズム以外の何物でもないでしょう。我々の要求項目のにキリスト者の戦争責任の追求というのがありますこれは単に現在の戦争に対するキリスト者としての反省としては理解できません。何故なら、今までべて来た教会の情態では、「戦争なんていうものは教会外の世界で行なわれている政治的問題の、政治的解決の破タンから生じたものであり、まず政治的に解決することが必要なんですよ」と自己を全

入させることなく、傍観者的に語ることができるからです。過去の戦争に於いても、たとえば、第二次世界大戦の時、軍に協力して司祭らが現地民に日本軍とキリスト教のスバラシサを宣伝し、司教が伊勢神宮に参拝しても、そういうことがスンナリ、教会の教えと矛盾なくできると考えたのも、装置としての教会という立場からは全く当然のことなのです。

そのような物の見方は、近代化路線、分業主義にのった、人間を統一体としてとらえようとすることを一切拒否し　人間を様々の機能の集合体としてのみとらえようとする非人間的な思考方法です。よって分断化の進んだ社会から生まれる深い人間的苦しみ、悲しみを共にしようなどという方向は芽ばえる筈がないのです。こうして、分業体制自体に対する斗いを放棄しているわけです。教会には、苦しみを共にしましょうとか、アガペーだとか、カッコイイ名句金言が沢山あって、これにごまかされてしまう人々もこれまた沢山いるのです。しかし、教会とは現実に苦しむ者に対しては一燈すらかかげてくれないのです。我々は教会は人間のためのもの、そして神の国を今生きている人間が、現実的に造ろうとしている努力の成果であると考えます。（このことは、教会の努力をふやせば神の国がやってくるという安易なことをいうのではなく、教会の質的発展は、人間が神の国を熱望しているという事実によるのだといいたいのです）その人間が教会外世界に行くとき違う人間になるなんていう器様なまねは、我々にはできません。我々はどこに行くにも、内なるキリスト、核たるキリストを必然的に伝えてゆくのであります。そして　分断化された人間の悲劇、たとえば、ベトナム戦争は実際に行なわれているし、しかも、ベトナム戦争は他人の世界であると平気で考えることのできる現実。ベトナムのアメリカ兵は、一体何のために戦っているのかわからずに、それでも自分の命を守るため、ワカラナイママ鉄砲をうっている。こういう無数の悲劇を知った時、ビアフラにいくらかのお金を送って、ワタシハヨイコトヲシタというのはおかしいのではないかと考えざるをえません。ビアフラも大日エゴイズムの合同に降伏しました。この様な形の慈善は自己満足であり、体制の糊塗にすぎないのです。

我々にとって立派な理論と呼べるのは、現実に即したものです。あらゆる斗争は現実に対する深い人間的な考察に基いて発生するものであり、現実認識を深めることでなければ斗争は組めないと考えます。これは、理論の画一性、定則性を否定している理論であって、いわゆる理論の現実に対する直線的援用という意味では理論をもっていません。ですから、我々の組織である武蔵野支部はきわめて実践的組織であります。そこにおいては教会を変革するものが、いわゆる教会内における現実との遊離、非人間性を告発し、それを大衆運動にもってゆこうとするものです。そこにおいては頭の悪い、沢山の理論を知らないものが斗争を担わなければならない時の必然的帰結であると考えます。又同時に　こういう斗いが今ふすべての人に求められているのではないでしょうか。

全都、全国のすべての斗うキリスト者の同志諸君！以上のような実践的斗争組織を各小教区、大学等その自分の場に構築されんことを訴えます。教会当局、国家権力のいかなる弾圧にあっても、それらの斗争組織の課題が一致していく方向で斗争を組織しようとする努力の実践は、必ずや統一行動、そして完全なる解放へとむすびつくであろうと考えます。

これからも、解放された人間としての自己を求めて、教会の弾圧を否定し　社会のただ中へひきずり出す斗いを先進的に組んでゆくことをここに宣言し、同志諸君の熱き連帯を求めます。

ただ今、キリスト者反戦連合は、財政難に面しております。何卒、多くの諸君のカンパをしてくださるようお願いいたします。

東大斗争支援を

キリスト者反戦駒場支部

厳寒の冬を迎えつつある現在、東大斗争も一定困難な局面に陥っている。

医学部処分に端を発した東大斗争は、六九年一・一八、一九の斗い以降、加藤近代化路線の台頭によって試練の時期を迎えているようである。一・一八、一九における国家权力の直接暴力装置＝機動隊八五〇〇名の導入は、あの安田講堂攻防戦に象徴される激しい衝突の後、数多くの負傷者、そしてそのうち多くが逮捕直後の機動隊員のリンチによるという悲惨な状況であるが、そして逮捕後の長期拘留という悲惨な司法权力とも一体となったまれに見る弾圧体制八と移ってきた。同じ頃、駒場の教養学部においては駒場共斗会議に結集する七〇余名の仲間が第八本館にカンヅメとなり日共御用部隊の兵糧攻めの包囲の中で一週間にわたる籠城を続けていた。進級タイムリミットの咽喉に動揺した多くの仲間、そ

れはたとえばクラス連合、クラス連絡協議会等のスト解除派なのであるが、ヘゲモニーを日共民青の直接指揮下に売り渡し、そこに大学当局＝学部教授会が癒着していくことによって、いわば日共管理体制が確立していったのである。一・二一の全都全共斗集会に参加するために八本外に出た仲間を暴力的に追い出すことに成功した日共民青御用部隊は、その後学内管理体制をみずからの思うがままに、しかもそれを学生の立場な要求という虚偽のヴェールで蔽い隠すことによっていわば「民主化」路線をつき進んでいるのである。

その間、加藤近代化路線は各学部のスト解除、授業再開、そして大学改革委員会を先取り的に運用していき、同時に全共斗の学内活動に関しては徹底的な機動隊導入、告訴等の弾圧にのり出してくる。そして、その中で多くの学生が再び日常性の円環の中に

才を潜め、重苦しい沈黙が支配する。試験強行、授業再開、しかもそこにはまず日共御用部隊の暴力的支配が実現されてくる過程の中で、確かに我々の斗争は試されているのである。

我々は、そこにおいて、我々の斗争の持っていた脆弱性を認めねばならない。すなわち、七〇年度末の深化していく中で、それが多くの斗争主体に、ってそれに現実と観念の断層を乗り越えることができなかった。「自己否定」が叫ばれつつも、一体化理論さえ自己とはという直接が殆どなされなかった。そして、自己にとって実践すべき課題というものが提起されたまま、状況の進行に追随していった。従って一度、機動隊、日共＝民青が登場する中で、自己と状況とが全く分離し、いわば街頭と学内とに分かれた大いなる断絶に苦悩するのである。六九年春以降、学内斗争というものが無いまま、すなわち、自己の存在根拠なるものに対して極めて曖昧のまま街頭斗争と駆り出されてしまった点は、今後の我々の斗いにとって決定的に継承せねばならない点であろう。

その点を明らかにすることは、学内での活動を再構築することである。今までのサークル活動が、サークルそのものを状況との緊張において捉えようとせず、むしろみずからの閉鎖的、自己満足的談話に終始してきた、それゆえに東大斗争の過程の中で殆どのサークルが斗争との関連性を明らかにすることなく崩壊していった。そのような閉塞性を乗り越えるべく活動を展開せねばならない。六九年度の新入生が無くなった現在、駒場は僅かの仲間が日共支配体制の中で沈黙と無気力にさいなまれている。我々の活動は、その中にあって、我々自身の場を、現在まで我々の展開してきた斗争すなわち反戦斗争でも合致した我々にとっての課題を持って、本来、普遍化せねばならないが確かに現時点においては、学内でのビラまきでさえ、どうしたらまち代々本パトロール部隊に暴力的にたたき出されるわけなのであるが、それにもかかわらず我々の恒常的活動を展開していく必要がある。

現在、我々は、研究会を組織し、そこにおいて、自己の実存を如何に実践へと至らしむるか、そしてその実践を自己へ還元していくのかという点にわたって追求しつつある。そしてそれは絶えず我々の学内における行動提起として現れる。とりわけ、七〇年における反博問題、それは我々が反博キリスト教館

を媒介として担ってきたのであるが、を学内に、
も仕掛け、それが東大斗争の過程で具体化された
問題の新相、たとえば、たこつぼ研究者・技術者の
の存在、そして若手研究者・技術者の管理化再編過
程へのくりこみ、知的生産内容自体の体制イデオロ
ギー化、等々を含みつつ、もう年上の国家イ
デオロギーの形成をめざしていくものである点をよ
り厳密に詰えていかねばならない。
我々は、七〇年代斗争を、再度学内の課題を担い
つつ、それを学に社会総体の問題へと普遍化して
いく作業を行うことによって、その第一歩を進めてい
く。青年戦線運動を、学に於ける内在的自己運動的発展を
学に結らせるため、そして学に理論的場を確保す
るためにも、我々は東大斗争の新展開を志向しつつ
運動していくであろう。

好評発売中
「なにをなすべきか」
中核戦武蔵野支部機関誌
一号，二号，三号　各50円
毎週日曜 吉祥寺教会にてお求め下さい。
吉祥寺教会斗争報告 etc

われわれは、今二の法廷において、二の法廷に立
たねばならぬ我々自身において、一つの社会的運動
の敗北の公敵結末ともいうべきものに直面している。
敗北――それは直接的には安保改訂という政府自
民党の行為をめぐって、日本を二分した二つの運動
の政治的抗争における反対運動の敗北であった。
だが、同時に、反対運動がそのうちに形成し、へ
革命〉的潮流として自己自身に反逆し、自己自身の
海象をつき破って、己れの真の表現にいたろうとす
る新たな運動の激しい台頭と崩壊とにおいて敗北は
根底的であった。
敗北の極北において問いつめるとき、激動の全過
程を収斂しつつ、一瞬のうちに走り去った尖光の中
にうつしだされたものが何であったかが混沌の闇の
うちに浮び上がって来る。
第一に、斗争の全過程を通して生成した新たな生
命の萌芽ともいうべき激しい胎動の出現である。
反対運動の奥深く、胚胎しつつ《反体制》という
反対運動自身のバリケードを越えて秩序との対決へ

向って進み出で、己れ自身の真の表現に至ろうとす
るこの激しい胎動こそ、激動の震源体であり、それ
はあの斗争においては、その先端を新たな異端とし
て、一つの《革命的》な潮流として出現させ、かつ、
それに触発された多様な《自立的》諸運動を広範に
流出させたのであった。
同時にそれは、反対運動の表方を覆う指導理念の
せめぎあいとなれあいをくっきりと死の影をおびた
相貌においてうつし出した。
思想が思想としての存在をその根底から問われた
とき、右から左まで、反体制という運動の球面にひ
しめく既存の一切の思想が空転したのだ。
それは民衆の内奥から流出する反逆の胎動にとっ
て偽象であることを自ら暴き出し、また反逆の偽象
であることによって、体制の偽象そのものに転化し
ていること、総体としての秩序の一側面としてあみ
こまれて了っていることを白光のもとに照らし出さ
れたのである。
だがオニに、新たな生命の胎動は、ついに己れ自
身の表現に至りえず、それ自身の先端において再び
新たな偽象と直面せざるをえなかった。

重万をなして転立するバリケード》をこえて進みつつ、再び完璧な秩序の網の目に埋没した全社会を前にして、ついに己れ自身の偽象に直面したとき――全存在の基盤を己れ自身のうちに見出し、つきだし、これと対決しなければならなくなったとき敗北せざるをえなかったものは、はじめて一切の幻像をこえて敗北の極北に近づいたのだ。

古い偽象を打ち破ろうとしたものも、また、それ自身の偽象をまとっていたこと、《革命》はただ疑似革命性としてのみ、登場したのであり、ついに、己れ自身新たな革命の偽象にすぎないという自己矛盾によって激動の退潮のうちに自爆し崩壊していかねばならなかった。

敗北の結果は、一切の偽象の回復であり、新たな偽象の神頭であった。そして秩序の回復は偽象の回復とともにやってきた。

現に様々の偽象とともに《革命》の偽象もまた存在する。革命とは何であるかという問いが改めてその根本から問い直されねばならないとき、なお、それが疑うべからざる前提として持ち出され、荒廃の極にその凝態を露き出し、しめ殺すことで混沌の闇を凝視しなければならぬとき、凝態への新たな回帰を行うグロテスクな姿がある。

挫折や敗北の凝態さえふりまきながら傷ついた魂へよりそってみせ、なぐさめとろうとするくずれた宗徒の自他に対する欺瞞の行為がある。傷つかなかった魂がある。

「勝利」といい、「敗北」といい、つまるところそれを己れの存在の根拠を賭した試験となしえなかった思想運動の凝態に他ならない。空転はかれらの存在の形態そのものであったのだ。

すべての人々が、それぞれにふさわしい方法で《安保斗争》と《六・一五》を葬ったというべきである。

葬ることでそれらは己れの古いあるいは新しい偽象を真象として立証し救いあげたと信じた。

多くて死者は永遠の沈黙の世界に去り、多くの人々はもとの偽象へと回帰し、古い偽象の裂け目においては新たな偽象がこれにとってかわり、それをつずめた。

そして一切の思想の根底に死の空洞をみなければならなかったもの、己れの救抜のための現実的支点を自らうち破り、一切を偽象として拒絶しなければならなかったものは、敗北の極北への道を辿っている。

この法廷の進行の裏側で、われわれが辿らねばならなかったものとして立ち会いを強要され、断罪と投獄とによって終結されようとしているこの裁判とは、過ぎ去った年月のうちに行なわれた社会的埋葬の公的完成にほかならないのだ。

2

略

3

われわれはいまこの法廷においてハイなるものに対しても同様だが自己を弁明することはできないし、弁明する意志もない。

この埋葬の公的完成において何がふさわしいかを知ることもできない。

壁を衝いて出ようとしたものは、把えられ、表現されることなく、再び底に沈んで了い、われわれは敗北者としてここに残ったのだ。

われわれは敗北の極北から出発しなければならない。だが、そこから、われわれの前に、それ自身の一つの防塞と化した全社会との真の対決に至る道は遠く、この強いられた関係において、われわれがなしうることは単に一つのエピソードとしての現実を打成しうるにすぎないであろう。

われわれが、その深みの中から、なそうとすることは、己れへの問いをいささかの幻想をも持つことなく、全社会へむかってもう一度、問うことだけである。

「お前にとって、あの斗争の現実とは何であったのか、あの斗争の現実にとってお前は何ものであるか」

これは、すでに提出された弁護人屋田哲治外七名による弁護人冒頭陳述の「補足」としての立場に立つものではなく、全く無関係なものとしてそれ自身独立した「六・一五被告事件」に関する被告人常木守の冒頭陳述である。わたしの弁護人がいかなる立証と弁護を展開することも自由である。しかしそれは、被告人としてのわたしの意志とは無関係にそこにあるものである。

「生」を求める行為は、「生」を拒否された時より始まる。「生」を拒否されることは、生を受けた時完成される。すべてが受身で語られるのは、生を受けることの曖昧さ・主体の欠除に起因する。

胎動する「生」への萌芽を含みつつ前進する異端の潮流が生じた。歴史の奥深く根強く流れる異端の潮流は、時として《革命的》な爆発を起しながら、次々と受け継がれてきた。自我への目覚めは、権利者としての自我ではない、歴史そのものとしての自我、純粋な澄みきった自我として始ったのだ。――そして斗いは、開始された、望まんとしてではなく、力、つ、始めんとしてではなく。大・一五の真の姿がここにある。

斗いとは何及。斗いとは、「生」を求めること、「生」に忠実にそして誠実に直面して。人の全生活として斗いは提起される。自己にかけるものがないと理解した時にのみ斗いは始まる……終りなき、あてどなき斗い。かつまた斗わざるをえない状況。状況に押し流される大衆、そして権力。それに一人反逆の烽火をかかげる。僕の内なる状況と、外なる状況の間の完全な亀裂、断絶。

しかし、斗いとは個人の主観的産物ではない。僕ら一人々々が、他の個人と関わらねばならない状況（これも存在拘束性に依拠する）の中にあり、主観という特殊状況と同化させることが、何にとどまる限りは決してなしえないがゆえに、断絶の実相の一部が現われる。この断絶を打ち破ること、すなわち閉塞状況を打ち破ること、及びそれに関わるすべてのことが斗いとなる。ここでは、何と私という二つの異る自己の状況概念が明らかにされていない。）しかも、斗いとは、自己の閉鎖性の中のみでは決して語られないところに、その本質がある。同時に、人間の実存と本質の止揚される方向性もあるのだ。

ここで注意しなければならないのは、私的状況と自己の閉鎖性の相違である。私的状況においては、《私》はその存在論的表現をもちえず、単なる現象として語られる。しかし、自己の閉鎖性というのは、人間存在の普遍的な形として、エゴを昇華させる過程の中で明らかにされていくものである。すなわち人間一人々々にとってみれば、自己たらんとして、自己そのものとしてだけ生きることができるのであり、それを通じて、自己たりえるし、人間たること

60年安保斗争を共産主義者同盟で斗い抜き、六月十五日、《国会構内集会》を叫んで南通用門及ら突入せんとし官憲にとらえられ、起訴された常本守の「六・一五弾劾冒頭陳述」の一部である。

「生」を求めて

惟方人

常本守の冒頭陳述書が僕にアピールしたものを再度考えなおさねばならない時がやってきた。秋がすぎやがて冬がやってくる。厳寒の冬が、冬に最も適している。大陸の冬、とくにシベリアの冬は、夜にもなると零下50度までさがるほどだという。マイナス50度の夜なぞ到底想像もつかぬが、恐ろしいほどの冬がすでにその足音をしのばせながら、すぐ近にせまっている。せまりくる冬に対して用意はいいか、斗いの用意はいいか。一人取り残された斗いは、すでに敗北の極北をめざしてまっしぐらに進む。雪ダルマが坂を下ってふくれていくように、事態は一宮忠の弾圧はますます厳しくなっていく。自らの中にある反逆のバリケードは、圧迫のもとでその発現を妨げられ、絶望のかなたへ押しやられる。

安保斗争が明らかにしていったものは、日本の政治諸潮流の対立だけではなく、すべての諸潮流の内包している人間の堕落と退廃の醜い姿である。一つの現実にさっときらめくこの断片は、人間れず欺瞞と虚妄の中に埋まり込んでいく。一人々々の意志がどうであれ、社会という名のもとに美事に埋葬される、腐敗しきった権力の中に。

一人の誠実な人間を葬るために、そして単なる犯罪として処理するために、わざわざ裁判という公的（？）な場を権力は設けた。その見えすいたうそを飾りたて正当化することの、ただそれだけのために。

凍りついた風は、すべての偽象と虚妄の渦を吹きとばし、生の姿をもたらしてくれるだろうか。それとも、すべてのものを、その防備の中へ、すなわち家庭や学校そして教会の中へ偽象のまま押し込めてしまうだろうか。すべての真実を隠蔽し、新たなる生命の息吹きを消しさらんとする凍りついた風が吹きさまくる。

僕の行く道の彼方に一体何があるのか。敗北の極北という立派なものもなく、混沌とした仮定的未来しかない。

も可能となる。しかも、閉鎖性なる言葉には、それのみでは何らの価値を含まない。ただ単に、人間の存在拘束性の一面を表現しているにすぎず、しかしながら、何らかの本質を示している。

斗いとは、勝利するまで、最終的に勝利するまで続く。ということは、終りがないことと同じである。斗いに勝つことが目的なのではなく、斗いの中で勝利すること、すなわち、斗いの中で、あくまでもその斗いに忠実であり、人間に対して誠実であり、自分に対して素直であることが目的とされる。現在的な自己にまつわりつく一切の関係、自分の現在的生命活動の範囲の中で表現される自己の矛盾した存在に対して鋭く問いかけるのである。

キリスト者、いやもっと快い響をもつクリスチャンとは、何と善良そうで晴れそうだろうか。しかし、本当に、クリスチャンは、善良で、人が良いのだろうか。僕は、クリスチャンと呼ばれることを、そして、自分をクリスチャンと呼ぶことを拒む。確かに現代の支配者にとっては、その支配の内容、社会の矛盾と搾取を看過し、ただひたすら愛を唱え、祈りへと問題をすり替える彼らクリスチャンは、善良でよき人間であろう。支配者にかわいがられるペット達。さらにあわれなのは、そのような存在としての自分に気づかぬ人々。

かわいそうな人々がいますから募金して助けましょうと一年に何度かさわぎたてる。そして、募金して金をめぐんだことで感謝されていると思い、何と自分は親切なのだろうかと思いこむクリスチャン。彼らに、貧しい人々は関係ない。彼らは、貧しい人々を心の低から軽視する。なぜなら、貧困の状態を考えないから、貧困の原因を考えないから。自分の毎日の生活は、自分のためであり、本来的には、他人と関係ないと考えているクリスチャン。単に一般信徒のみならず、神父やシスター達。彼らに、苦しんでいる人は必要ではない。彼らは、苦しみたくないがゆえに、かつ苦しみを知らぬがゆえに、苦しむ人々を必要としない。彼らが必要とするのは、彼らを愛する人、彼らを敬う人、彼らに従う人々である。だから、彼らに斗いはわからない。斗いは、自分のそうした存在の矛盾に苦しみ、脱出しようと誠実に実践する人によって担われる。何人言いたくても言えぬ状況、自分がクリスチャンとして存在しえぬ状

況等々、自分の抑圧と内的な要求の混乱。これらに自分を尽して生きることが斗いなのだ。背を向けることではなく、目をつぶることではなく、どこかに逃避することでもない。

たとえ、敗北の極北が、崩壊の高原がまちかまえても、進まざるをえない。進むことにより、不安は一乃拡大し、自分を包みこむ。恐怖は、心を蝕らす。

斗いとは　苦しむことにつながる。だが、ここには、悲劇的ヒロイズムはない。生きることの喜びと清らかな目の輝きがある。苦しみは、楽しさ、浮世的ではなく、行為としての楽しさ、本当のことの楽しさである。クリスチャンの偽善的、背徳的行為では決してない。

但的状況（私的状況と区別されたものとして）を真に但的なものたらしめることによって、類としての、普遍的な、自由な存在として自己を確認しうるだろう。但別利害の追求による但と但の断絶の激化、すなわち、私的エゴによる人間の疎外は、但的状況のうち人間を疎外し、より一乃人間的現実性を損めていくに違いない。

だからこそ、斗いの前提として、かつ斗いの中にあいて、但と但との断絶、但と但との空間的かつ実践的分裂を深く認識することが必要なのである。人は、だれでも、自分以外の人間を敬するが、敬するままに人間が存在することはない。この事実はいかなる意味をもつのか。いかほどの重みとして感じられているのだろう。自分を自分と意識しうる自分は自分一つだけあり、一つしか存在しないのである。自意識をもつ存在としての人間が、その自意識と生命活動体において一つしかありえないことの意味は重大である。

人は他人と一致したいと願うつねくまでも自己の解放という次元で）。それを、自分なる存在と他の存在との重合と考える。ところが、自意識的生命活動体の重合がありえないために、観念としての一致ないしは、自らがそう思いこむことによって、その欲求を満足させる。すなわち、自分が行動することは、人類のためなのだと考えたり、多くの人間がこう考えているからその点で共同体の形成が可能なのだと考えるのである。

すべてがむなしい。自分が自分として生きることによって人間として生きるのだという視点がない

なきまた彼女達と同じだという意味において。

一八三四年、世にはさほど知られていない、そしてまた、世界史の流れの中では最も反動的とも呼べる動きが、英領バルバドス島で起った。血なまぐさい暴動と虐殺とが、今まで平穏であったこの島で発生したのである。つい三ヶ月ほど前に法令によって自由の身分と得た男女二〇〇名程度の黒人が、ある朝、もとの主人であったグレネルグの家に押しかけてきたのである。しかも、それが再び元の身分に戻してくれとの陳情書を持っていったというのである。彼等の中で、陳情書を起草し、グレネルグの前でこれを読んだのは一人の再洗礼派の牧師であったという。とこころが、グレネルグはどう思ったのか、これをすげなく突き返し断った。この時である、あの血みどろの虐殺が起ったのは。何と黒人達はグレネルグを家の中に押し込め、それから家族もろとも皆殺しでもって彼に報いたのであった。グレネルグが陳情書を拒んだのが、それが法令に反するからなのであったためなのか、彼自身がいわゆる進歩的思想の持主であったためなのか、それとも瞬間的・反射的に黒人達を忌み嫌ったためなのであるか全くわからない。が、ともかく、この黒人達がその後自分達のもとの奴隷小屋に帰り、またもとのような農奴とか労働とか賃金とかを始めたという。このような例は、たとえば土地ブームにのっかって土地を売り払い急に大金をつかんだ農民が、その大金の処理に困ってまた元の農民生活に戻ろうとするという場合などに類似したものと捉えられるかもしれない。そして、それがこの事件のように自分達の公民権すら放棄するよう申し出て、しかもその申し出が拒まれるやもとの主人を殺してまで奴隷生活に復帰しようとするということに至るとなれば、それが単に貧困が無知であったためか、啓蒙が足りなかったというこの問題に解決できないというのは自明であろう。

抑圧からの解放とは、近年とみに我々が好んで口にする言葉である。ところが、隷属の状態から一気に自由の状態に飛び出された時、人間はそこで遥拝の重荷、自立の苦悩を一身に負わされることになる。そういう時、ふと自分自身を他者へとエポケーのかたちになさしめてゆく、つまりはみずからの自由を

すすんで放棄していくことにもなるといえよう。我々がこの世に住む限りにおいて物理空間を他者と等しい分け合いせねばならないのだとして、もともと自由な人間にありはしないのだと言っての什る人もいる。しかし、むしろそれ以上に我々の感ずる自由が他者との間で相互に交換可能であるような風潮の中に、他者を落とし込める意味においての自由であるということを指し示しているのである。私が禁止することによって他者がその倍だけ動かねばならない、言い変えれば、私が仕事をしないことによって誰かが二倍使われる、そういう自由なのだ。だからといって両者が和解しきってつなぎ合って生きてよしなどと言うことは許されない。そこにはやはりいってよいほど辛いとか辛いとかが起るからである。自分一人の利害の追求は、結局のところ競争とか統率とかいったかたちで展開されるのであるが、それと全く同じ様に、自己を他者の掌中へとゆだねていくことも人間は好むのである。バルバドス島の黒人たちが奴隷状態への回帰を願ったように、我々も時として奴隷状態における幸福を求めるものである。現状の呪縛からの脱出にしろ、現状の不条理の中への居直り的没入にしろ、いずれにしても、自己を一度引き上げ高みからいわば演出的に降下させていくということにしか変わりない。それが現状の奴隷としてみずから居すわっていく時に奴隷状態の幸福が身体をも保証していくことになるのだろう。ここでは、隷属状態が先か、幸福感が先かという試論とするのではなく、そういう状態における幸福感が依然として存在するということを言っているのである。恋人達にみく見受けられるよう、相手の意志に身を任せていくということも、自分一人でつつましく閉じこもるのではなく、厳然とした関係の中に身を置くという点でも、それなりの意味があるだろうし、それがセックスそのものであるとしても言いだろう。快楽を基本原則として、肉体をその方向に常に向けていくというのも、モラリストの弁は別として、当然である。そしてまた、そういう肉体が自由なるものを全く馬鹿馬鹿しいものとして投げ捨てたとしても、今更驚くに値しないであろう。

さて、こういう奴隷状態における幸福の様相を、

女性の肉体の中に領域内に追求していったのが「〇〇領域の物語」である。主人公〇は、確かに何処にでも居るような普通の女性、つつましやかな女性である。つつましいといっても、それは求めて見かけだけの、他人が形容するようなものでなく、「感覚をあたえればただちに反応する 不羈不屈のつつましさ」である。鞭に打たれることによってその苦痛ですらんで感じとるようなつつましさ、裸であることを羞恥するつつましさではなく、自分の裸が常に男達の眼となってはじめて羞恥であるようなつつましさである。肉体を責められることによって身につけた品位なのである。城館につれて来られた〇は、男達の前で押えつけられ、解剖に晒かせつけられ、暴行と拷問とを受ける。

「あくまで問題なのは、苦痛をあたえたり叫びをあげさせたり、あるいは涙を流させたりすることではなく、むしろこの苦痛の手段によってお前が自由を束縛された身であることをお前自身に感じさせること、お前が自分以外の何ものかのために、完全に犠牲にされた身であることをお前自身に納得させることなのだ。」

身にまとっているもの全てを脱ぎ捨てる。コルセット とかペチコートとか、かもぐり捨てる。勿論、ブラジャー、パンティーなど肉体を惑わすものでしかない。その代りに彼女は、鉄の首輪と鎖とで縛りつけられる。両手はせばり鉄の腕輪で固定される。つまり上品な彼女は自分自身の手から解放されていた。彼女の肉体は、彼女にとっても手の届かないものであり、だからこそ、苦痛の記憶が彼女にとって忘れられないもの、むしろそれ以上に、彼女のセックスをより昂ぶらせるものとなる。誰にひけても解放されている彼女の肉体、多分このような感覚が、より一層彼女を刺激し興奮させるのだ。そこでは沈黙と鎖とが、ひたすら受けることのみを待つ女のにとっての救いとなっていたのではないだろうか。のを縛りつけるはずの鎖、息づまらせるはずの沈黙が、逆に彼女を彼女自身から解き放っている。そのときに、そのは始めて次の様に語ることが可能なのだ。

「あなたが驚くなんておかしいわ。あなたの愛撫というものを、もっと仔細に眺めてごらんなさい。あたしが女であり、しかも生きているということを一瞬間でも理解するならば、あなたの愛撫はぞっとするはずよ。あたしがあなたの肉体の熱い血の泉を忘れたとしても、それが溢れつきたことにはならないのよ。」

連日のように男達の眼と感覚、唾液と精液とにさらされた彼女の肉体も、おえってそうであるが故につまーさが得られたかのようになっていく。男達の舌が荒く回った唇も、たえずうずく乳首も、無理やり開かされる眼も、掘り起こされた快楽の共同の入口も、〇の品位を残していくものだ。〇は決して特別な女、色ざんげとか精神異常の女ではない。無知な女でもない。それにもかかわらず、彼女は一歩踏み込んだ世界で、彼女の思考とは全く無縁なところで繰り広げられる運命の遂行に引きずられていく。沈黙の中で自己の領域を一つ一つ売り渡していく肉体、それも彼女を凌辱する視線と手と器官と、彼女を引き裂く鞭の下で、熱狂的なまでに自己を喪失していく肉体、無に向ってひたすら突き進んでいる肉体ということよう。不思議なことにそこにあの聖女カタリナの殉教図の中の、拷問具とか奇妙なまでに二重写しとなって現われてくる。〇の場合、約束されたものにみずから関与することなどいっさいない。全く無名の、全く匿名の女でしかなかった。「彼女と同じ様に闇かれ、犯される娘たちの中の、任意の一人」にすぎなかった。

結局、〇は「神聖な娼婦」なのであった。そしてそっくりの彼女のプロスティテューションが我々を当惑させる。

「あたしが不安なしでいられるのは、あなたに苦しめられている時だけなのよ。あなたは、あたしの泣くと云うことすでに見たことがあるわね。あとは、あたしの涙が好きになりさえすればいいのよ。咽喉をつまらせ、泣き声を押し殺し、ゆれにもあらぬ身を震わせるとき、あたしの首は魅力的ではなくって？」

「たとえあなたと裏切っているのは、あたしの想像力、あたしのぼんやりした夢想なのよ。本当は、あたしの身体と衰弱させて、あたしの霊魂の中から、こんな妄想をすっかり追い払ってちょうだい。あたしの身体を、あたしの自由にならないよう

にしようだい。あなたと交わることを考えるまでに互いのそれを語っていく必要があるだろう。暖さんないように、あなたのほうで先手を受ってちょうだい。」

世のモラリスト達はよく愛という言葉を口の端にのせることが多いけれども、それが何でもかんでもただ一言「愛」とさえいえば全てがわかりあえるかの如く、まるで切り札の如く重宝しているらしい。それで片付いてしまうような問題などないのであるが、むしろ愛なるものが幻想として現実感を欠いたところに登場してくるとなれば、そうはいかない。ハーかも、人間愛だとか同胞愛だとか実に高尚な理念で抵げられるのであり、その当に加えられる嘲笑にうつつをぬかし、自分は肉体的な愛などは無縁かの如く独身貴族ぶっている自称モラリストたちが、近頃なか一人とか二人とか秘かに隠し持っている例がありと聞いている。ともあれ、それにとって、自分と接する人間、それが男であれ女であれ、身体と身体とが立っているこの世の感覚とはこれのを欠いて相互の関係など語っても意味がないだろう。それが単に一般的なものではなく、特に恋人達にかいる場合のように両者の関係が現に肉体の接触を通じて

ちの愛撫はあたしにとって何なのでしょう？あたしの快楽は、あたしにとって何なのでしょう？」

もりやOは一向しという問を発することはできない。何故、彼女が男達と快楽をともにするのか？何故、彼女が恋人以外に忠誠をつくさねばならないのか、そのような問をすること自体不可能なのだ。ただ、その快楽が彼女にとって何なのであるのか、彼女の恋人が彼女にとって何なのであるのか、それだけである。そして　そういう問も既に答を失ってしまっているのだ。ただひたすら自分自身と男たちとの関係の中に落ちてゆくことによって、その確証を得ようとする。彼女にとって自由など眼中にない。おったとしても、それはそれまで自由を謳歌した自分にむかって嬌声を浴びせかける点にありてである。かえって拷問の方がよほど心地よいことか。彼女はすからそれを欲したかの如く拷問の数々も登場する。Oの恋人が彼女に要求したのは簡単なことだった。誠実に勝を問じ合わせないこと、いつも唇と半ば開いていること、つまりいつでも彼を受け入れる準備をすることに他ならなかった。そして切実、Oにとってそうすることはかなりの困難を伴うのだった。けだしOは罪人だったのである。彼女の見つけた罪というのは、彼女の行為にあるのではなく、むしろその内面に隠れていたのだった。恋人ルネが見当らなくなった時に感じる、見捨てられた者の罪性、つまるで自分がゴモラの柱さながらに、にがり、無用な、呪われた灰の柱になってしまったような気が彼女の内で渦き通る。またある時、ステファンの前で脱衣し、いつものように愛撫を待ち受けていたその瞬間、実は何の合図も印もなかったとふと気がつくことによって襲ってくる恥らいの気持、「自分がふくなるなんて滑稽だと思った。娼婦が恥かしがるなんて！」　その時に彼女は自分が実は娼婦でしかないことに気がついている。敵軍なまでに進んでいた連合が、いつの間にやら全く逆方向に方位を定めていたのだった。何の変哲もない女O、それが最後には一種の淫売宮に身を置くのだ、だからといってOがこれに抗して生きるわけではない。死にむかって乙の自己喪失の過程を、みずから無に化していくのを待つばかりに進んでいく。みずからが隷属的に身であることは、彼女自身が誰よりもよく知っ

ている。「神聖な娼婦」は常に他者の存在を前提とし、しかも他者に対しては匿名であらざるを得ない生の過程をかたどるものだった。そして、自由に対して、できる限り顔を背け、身をかわし、おちつきを失っていこうとする。従って、赤房Oが自身の毛髪を眺めし、下腹部を鏡で封じ、ぶくぶくの顔をかぶって鏡につながれる身であったというのも至極当然なこととして思われるし、そういう彼女に、死こそ永遠のものは、死するなれば彼女自身の感覚に訴える幸福の語彙を提出したのではなかったか。そういう奴隷状態における幸福を、我々は決して看過してはわうない。そしてそれが単に自分自身の中に発見できるということ、喚起したのではないだろうか。相手が黒であろうと、白であろうと、人間であろうと神であろうと、そしてまた幻想であろうと、としかくそれは中でひたすら孤独で本性に精を出す人間、生ての人間がある かれ少かれ。このような状態に身を置くものであることと、この物語は示している。別に奴隷制の弁護論でも何でもない。ただ人間のこのような状態を彼自身に返すべきであったと言えよう。ガルバドス島の事件が、彼に与えるショックのプレハブ、アクアだったとしても、そこには一回の真理が提出されている

趣味はやめにしよう。事はむしろ我々が作者の提出したこの受けとめかたということなのだ。確かにそれはチャップで危険な書物である。が、作者ボリース・レアージュなる人物は、敢てそういう危険な挑発を我々に向けたものである。一人の何人たりともいうような女性Oを相続人相続人へと追いやることによって、しかもこのセックスの中にそれを追いもめていくということ、奴隷状態における幸福の語彙を提出したのではなかったか。そういう奴隷状態における幸福を、我々は決して看過してはわうない。そ

ずからを隷属の状態に置くということは、なるほどこの者に自己を失う。そしてとどのつまりが死神にむかってのひたすらな歩みなのである。だが、Oについてとあれかこれかという詮索はやめにしよう。安、ぼくはヒューマニズムとか、自己疎外的なモラリスト面はやめにしよう。進歩的ポーズとか回顧

ではあろうし、もしそういう考察を欠いた人間想定ほど意味がないともいえるのではなりだろうか。とまれかく、我々としてはこの点をふまえつつ、より一人人間の自由なるものに対する諸相を明らかにせねばなるまい。

ニューオーリンズの片隅に
一軒の小屋があるという
その名は朝日の家たる家
哀れな女どもの末路
そう、その一人が私なのさ

今思い出すのは母さんの言葉
黙って聞いていさえすれば
何も外に出る必要などない
まこのせい、何と愚かな！
中さずりの男に身を任すとは

「註」1)ボリース・レアージュ「O嬢の物語」

(2)ジャン・ポーラン「奴隷状態における幸福」より
(3)同右
(4)カトリック教会においても近年そのような手例がかなり報告されている。
(5)ボリース・レアージュなる人物が実在するのか存在するのか、それも明らかにされていない。一時はジャン・ポーランその人が彼であるとの説もあったが彼の死後それ否定されているらしい。
(6)「雪国のあたる家」アメリカ・アポリ・ソング

（未完）

「杉」

……自由主義的なまやかしが行われているあらゆるところで、――パレスチナで、インドシナで、フランスでさえも、――そのまやかしを解明し一つづけることによって、また、政治的軍事的弾圧の古典的手段を正当化するところの国旗や憲法に表わされた自由の偽像を、実効ある自由、みんなの生活の中で適用する自由、つまりヴェトナムやパレスチナの農民の生活にも、西欧の知識人の生活にも通ずる自由の名において、批判することによって、確実になるのだ。我々は、この自由が観念化し、自由な人間よりも自由そのものが擁護され始めるやいなや、偽りの看板――暴力のへ厳そかな補見――となり始めることを想起しなければならない。……

M・メルロ＝ポンティ　「ヒューマニズムとテロル」

ある日の親鸞

――長野　慶――

ひと祭りも過ぎ、そろそろ都では初夏の風が南から舞いおりてこようというのに、越後はまだ深い雪につつまれていた。今年はいつもよりいっそう寒さが厳しく、降り積もった雪が十日程たってもまだサラサラしている程であった。

親鸞は今日に限って朝起きた時からどこかおちつかず、読経がすみ朝の務めを終えても、書物に向う事すらできなかった。それはこの長びいた冬への憂いや、いつもより遅めに据えられた朝の食卓からのいろだちとは全く別のものであった。ひとりもんの子、迷い有ってしかるべきものだがそれにしてもどういう訳か。彼はその理由を一生懸命自分の心に問いていた。ひはてさて、いったい何事がわしをこれ程までにさせるのであろうか。彼は何度も考えてみたがいっこうにそれがわからなかった。「これだけは良信尼に相談するわけにもまいらんて。」日頃、彼の話しに耳を傾け、自分の体験に基いていろいろな答えを与えてくれる書の良信尼を見なから、彼は一人で苦笑した。

親鸞は、いつになく寺の庭で遊んでいるこども達の騒がしい声にいらだちを覚え一人静かに玄関に降りたつてワラジをはいた。誰も彼を見とがめる者はいなかった。彼はそっとおもての道を下り、途中から畑のアゼ道に足を踏み入れた。「誰かに会わねばいいのだが。」と彼は思った。会うことが何か主まりわるかったのである。彼は黙々と、誰も踏み込んだことのない新雪の中を歩き続けた。彼は御でいう。「興也の墓地」に浸っていた。

畑は全くの銀世界であった。稲刈りのあとで積まれた稲藁の山はまだ残されていてやはり真白な雪の中に埋もれているのが見えた。

突然彼は、きゅうの周り合いでの人々の様子を思い浮かべた。

「和尚さま、また戦が始まるだかし」

「いいやそれはわからぬがのう、恐らく大乱にはならぬじゃろうて」

「戦が始ったら俺達百姓は逃げるしかねえだよし」

一人の老いた作人が、少し青ざめた顔をして叫んだあとを追うようにして若者が言った。

「いいんや、戦はこんな戦役までやってはまめえ。だが年貢は重くなるし、付加米もいつもより余計になるべな、どっちにしても俺達はひばしだし」

昔んなはうなずいた。一人が言った。
「ふまけに夫役もみんな俺達に有がりだ。戦が来なくったって俺達は死ぬようなもんだ。」
そうだそうだという声の乱れと共中で、会場は大騒ぎになった。
「全く戦になったら俺達どうするだよ」
「何の餌食になって、このたれ死にするだよ」
今までの静けさは一変で共なりれた。めいめい勝手な事を言いあっている彼らの間に立って、親鸞は何も語ることができなくなった。
「昔の衆、静かに静かに、まあ和尚さまの話しを聞けや。そう心配しても始まらんべし」
人々の中程にすわっていた名主がたまりかねてみんなを制した。親鸞は、人々の余りにも深い憂いに、いささか動揺を隠せなかった。
「お白世衆、わしには何も言えんがのう　今の帝府なら当分間に泰じゃと思うておる。のう昔の衆、こんなときみだりに心を迷わすものは、ふだんの行の心を忘れておられる人じゃ。こんな時こそ仏の御名を唱えて心を静めようではないか。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……」
他の人々も一声に唱名をとなえはじめた。しかし、もはや人々の心の動きが、そう厚々と抑えられるはずはない、ということを親鸞は敏感に感じていた。

親鸞は、自分の言動によって、人々の心に傷がつく事を極度におそれていた。それ故、人々に余り刺激的な事実を語ることは好まなかった。流されてきた当時から、都でのでき事は、全てこれら純朴な人々に無関係なのだ、そう思って彼はできる限り、その節を避けた。彼の信仰は、自分の罪業を悟って、それを生きられた者の宿業だとし、全てを仏に委ねることによって救いを得る、という事ではあった。が、この静かな、知も知らない村の人々に、京の町での殺盗、殺傷、タイ流と堕落、人買い、果ては僧侶の女犯までを語ることは、彼には耐えられなかった。勿論が人間は罪深い。しかしそれをあるがままに述べることは、人々の心をかえって迷わすだけなのだ。それは人々の興味をそそるだけで、何の役にもたちはしない。そんな事は隠せるだけ隠しておけばいいのだ。ここの純朴な人々に言ったところで害になるばかりで何の益も与えはしない。
しかし、そんな考えに疑問を投げかけたのは患者

居であった。
「人の性はみにくいもの。されば、それを語らずして極楽浄土のと夢の様な話しばかりをしている御坊の説話が、なんで人々の共感を呼びましょう。例えこの村に人殺しがあるとも、人々の心には必ずその様になる必ずものがある、と感えるべく何故念仏のありがたさが分かりましょうや。白世衆に都のみにくさを語り、人の汚れまった事を語ったのち、例えば人々が一時心を迷わそうとも、御坊の念仏が真実なものであれば必ず人々の心に仏の功徳が与えられるはず、そうではございませぬか。今、ここにあって、村人達が都の人々と共に苦しみ、共に念仏を唱えるのでなくって、どうして真宗が真理であると申せましょう。」
彼は、その言葉を奥にたたみこんで、いく日か考え迷った。そしてまのう、ふとそれをためしてみようと思ったのだ。それで人々に宗でおこっている戦の話しをし始めたのであった。だがその試みは無残な失敗に終った。人々は彼の話しを聞こうともしないで早くも心を忘れさせてしまったではないか。「まのうの説話は、人々にどんな衝撃を与えたであろうか。とりかえしのつかぬ事をしてしまったのそう思いながら、親鸞はあいかわらずアゼ道を、足が深い雪で埋まり冷たくなるのも構わずに歩いていた。むこうから、一人の白世が、やはり彼と同じ様に、ぬれて冷たくなった足をひきずるようにしてやってきた。親鸞は声をかけた。
「奥さのう。今年は格別じゃそうなし」
白世は頭をペコリと下げると答えて言った。
「お奥ラゴザいます。ほんに、これでは仏っ者が来ますものやらし」
親鸞はうなずきながら言った。
「まことに、これでは畑仕事も手につかぬじゃろうべし」
白世が答えた。
「ほんに今年は凶作になるかもしれません。それを思うと気がめいってなりませぬし」
親鸞は表情をくもらせて言った。
「わかるわかる。だが自然を怨んでみてもしかたがないでの。自然は名の心と同じじゃし」
白世はニッコリ笑って言った。
「そうは思いますものの、なかなかし」
親鸞は、畑の中に身をおとし、その白世が通れる様に道をあけた。

「これはこれはすみません」
白世はまたぺコリと頭を下げた。
「なに、お白世殿はこれから毎日冷たい水に浸らねばならぬ。それを思えばのブし
「いいえ、とんでもございませんし
白世は恐縮しながら彼の横を通りすぎた。
「どうぞお気をつけて。アゼ道は雪が深くて足のラゴザいますよ」
「ありがとう、ではなッ」
親鶯は、彼の行く先に足跡が続いているのを少し不愉快に思った。今まで、彼の前には、深い白雪の他、何も見当るものがなかった。有るといえば、やはりかそう日雪のふくらみと、かわいいスズメのつぶ跡だあった。「おやおや、とんだものので風情をこわされてしまった」とと親鶯は思った。彼は別のアゼ道を行こうと思って、あたりを見廻した。もとより別に行くあてもなく。ただ白い雪の中を幼なご子の様に歩いてみたかっただけなのだ。だがアゼ道らしいものは他に見つからなかった。
「しかたがない、このまま行くか。もうケし行けば他のに行きあたるかもしれぬ」親鶯は先程の白世がやって来た道を進み始めた。足跡はずっとむこうまで続いていた。彼はそ跡をザエメよ歩る様に自分の足を新雪に踏み込ませた。足跡は四つになった。彼は興味のまま進んで行った。
彼にはまだ真赤なもみじで燃えあがる観音岳も、今は銀色のまぶしい光を放って横たわっていた。「観音様も寒かろうて。誰ぞまた着物を着せた者がいようが、それでも寒えておじゃるどろう」親鶯は、その雄大な雪山を仰ぎながら妙な感慨にふけっていた。「世の中にはまとくなん人が居るもんじゃ。毎年冬を向えると、忘れずにあの観音像に綿の着物を着せていく。石に着物を与えて何のとくがあろうかという輩もおるだろうが、石の中にも仏心ありということかのう。いやいやそんなものでもあるまい。その人は何か欲しくてそんな事をしているのではなかろう。例え何も欲せずとも、白い雪をかぶっている石像に降れみを加えてやる、それが人情というものかもしれぬ。」
むこうから人影があらわれた。
「おや、和尚さまが、どこへ行きなさるんかねし
「ちょっとな。考え事をしてたんじゃよし
ミノ笠の白世は、不自議そうに親鶯の顔を見た。
親鶯はわざと白世の視線をよけた。

「おやまあ、足がびっしょりで。ワラグツをはいこい良さそうんのか」
白世は親鶯の足もとを見て言った。
「わらぐつよりもこの方が軽いでな」
親鶯は思たびとワラジをつけた足をゆびとさしてあげた。
「そりゃはいりましねえ。わしのワラぐつを貸してやるからはいてくれ。そんな重してたら体の具合でも悪くするに決っている。」
白世は親鶯をいたわるように言った。
「いやいや、おまえさんのはいているくつを取る訳にはいくまいて」
親鶯は首をふりながら答えた。
「ううん、拾の身はすぐむこうだ。いいから俺のはいてくれ」
白世は自分のワラぐつを足からぬき取り親鶯の前に置いた。白世は彼がそれを用き入れるまでテコでも動かない様子であった。
「すまんのう、ではお貸りするよし」
親鶯は自分のわらぐつをぬいで、わらぐつを手に取った。
「よかったらタビも貸ーしやるだが」
「いいや、それ日勘弁しておくれ。おまえさんの方が風邪をひくと思っている」
親鶯はこいねがいにことわった。そしてワラぐつをはくと、また畑の中に身をよけた。
「どうもすみましねえ……」
「がいや、早く帰って、いろりで身を暖めて下され。ほんに申し訳ない事をしました」
親鶯は深く頭を下げた。「いやいやしと言いながら白世は急ぎ足で彼の前を去っていった。「気心とはありがたいものだなあと彼は思った。
彼の行く先々に、また新らしい足跡がでてきていた。[illegible]
冬でも畑を見廻っているというのにわしはなんて役立たのだろう」親鶯は、もはや遠くに去ってしまった白世の後姿を見つめながら頭が下がる思いであった。彼はまた歩み始めた。少し行くと、アゼ道が二つに別れていた。足跡は一方にだけ続いていた。彼はそこで少し迷いながら、二つの道を見つめていた。一方は何気なく通って行った人々の足で荒らされ所々にこげ茶色の土のしみが浮き出ていた。一方はまだ、自然のままの白雪が、うず高くやわらかく曲線を描いてふんわりと大地をおおっていた。彼は

もう一度二つの道を見つめた。そして足跡で乱れた方が道の方に、ふと足を踏み込んだ。「わしはやはりこの方が性に合っているのかもしれぬ」と道は思った。親鸞は歩き出すから鼎の底にふけっていた。「わしの子供の頃はこんな事もできなかった。ここは貧しいが平和じゃ。人々は都をあこがれて、わしにその節をせがむが、そんなにも都とは美しく見える所かの。都の人々の心は乱れ、正しい道理でさえまともには通らぬというのに、全く都人は何か知っている様でいて浦っ子はおろかものの群っぱはおろあ様じゃ。」

その瞬間、親鸞はハッとした。

「ここのお百姓衆はわしの言葉など聞かずとも、あのすから名と会得しておる」

親鸞は、生れながら天(たんて)を知り地を知っている、山と海の始末を知っている、雪にさわって者が来ることを見分ける才芸さえ知っているここの百姓達をつくづくうらやましくなった。

「わしは、ここの百姓達より必ず負勝れているというのか。」

親鸞は恥かしそうにあたりを見廻した。神もやってくる春子は春が来た『さて、帰ろうか……』

夕暮れが迫ってきた。すっかり暗くなった空と、あたりの静けさにふと思いをかえして親鸞は足を速めた。彼の心に人々への感しさがよみがえってきた。

夕暮れが迫ってきて、家々に灯りがともり始めた。おまどの煙が窓のすき間から炊き出している家もあった。この奥庭の中で元気に飛びまわっている子供達が親鸞を見つけて駆けよってきた。

「お尚さん、どこに行ってたんワラぐつはいて」

「寒くないの、大人は火の子だから家に居るんだって」

「みちゃんが言ってたよ」

親鸞は子供達の声に答えてニッコリ笑って言った。

「いやちょっとな、アゼ道を歩いていたのだよ」

「へー、アゼ道になにかあったんかい」

「いいや」

「和尚はおかしな人だのう。一人で用もないのにアゼ道に行くけんて」

「そうかのう、おかしいかのう　ワッハハハハッ」

親鸞は、子供達一人一人の顔をながめた。ホッとした気分であった。子供達が言った。

「和尚さん、また お話し聞かせてね」

「うむ、聞かせてやるともし

「親の言葉はいい音あし」

親鸞はちょっと考えを廻らせた。

「そんなに都の話し方好きかのうし」

「好きじゃ好きじゃ、なあみんなし」

子供達は一声にうなずいた。

「いいとも、聞かせてやろう、また寺においで。甘酒でも用意しとくかろのうし」

「ウワアーッし」

子供達は歓声をあげた。親鸞はニッコリ笑ってうなずいた。

「さあ、家で心配しておるぞ、早う帰れし」

しばらくの間、子供達は親鸞のまわりでワイワイやっていたが、いつのまにか一人二人去っていった。彼らが帰った後に、親鸞は一人ポツンと立っていた。「これでよい、これでよい、寂しいるじゃ。何も淡すことはあるまい。」

親鸞はまた歩き始めた。「わしも早う、春の雪を見わけることのできる百姓のようになりたいものじゃ」彼は一人つぶやいていた。

―完―

〈あとがき〉

宗教が「迷信」であるか「開化」であるか私は知らない。だが、真実を真実として人々の心に訴え、その真実の中から何かを見い出そうと努力する、それが宗教の本質ではないか、と私は思っている。「善良な信者」の為に、真実を隠して神女を入れ替えをした宗教団体もあるという。現実の矛盾を語らずして「天国」とか「愛」というカッコのいい言葉に酔っている宗教も有ると聞く。私は教会にはエリートが多いという事を知っている。Y君が、少し労務者風の服装をして行ったら「あいつはヒッピーだ」と言われたそうな。クリスチャンとはそんなものだ。どこに都会のクリスチャンとは。自分の口は、自分を下げすみ、自分の心は人を下げすんでいるという、最も卑劣な自分の姿には、全く気ずかず、たえず、自分のまわりだけを良くしている。

それが現代の、典型的「善良なるクリスチャン」の姿であると、私は思っている。

しごと

わくらば

やみのなかに
なげられた
ひえんびんの
まっかなほのお
それは
せいのあかし
おれが おれであることの--------。

「おにいちゃん」「おにいちゃん」
ちっちゃな ひとみは
わらっていた
(しろい)ボールを おって
はしった せまいしせつを-------。

だれだ
おれが おれじゃなくて
あいつが あいつじゃないことを
いる ヤツは------。
ころしてやる!

信濃町救対へのカンパの呼びかけ

信濃町救対
(新宿区信濃町33 真生会館内
Tel. 353-0401)

潔白とは汚れを知らぬことではありません。権利とは知らず守られるものではありません。一見安穏と流れゆく日常性のうちに、白壁にしみが生ずる如く、我々はむしばまれてゆきます。個を超越した絶大なる権力は、徐ろに絶ゆまず、我々人民の権利を脅やかしてくるのです。ですから、すべての人民はその基本的人権を守るために、具体的活動に断固として立ちあがらなければなりません。今や、ブルジョワジー政府権力にあやつられた官憲の弾圧は、基本的人権などに何の顧慮をすることなく、その破廉恥な姿をさらけだし、あらゆる手くだを弄し全人民に襲いかからんとしております。デモの不許可、不当タイ捕等は日常茶飯事となり、人の眼のない留置所、拘置所において、被疑者――犯罪は何ら確定していない自由人!――に対して行なわれるイヤがらせ、リンチは「拷問とどこが違うのか」という程にまでなっています。このようにして、人民の権利を行使しようと具体的行動に出た人々を、裁判などという面倒クサイ方法だけで弾圧するのに満足せず、手っとりばやくたたきのめそうと専念しているのです。

このような現実をふまえるならば、国家権力と斗い、自分達の人権を守ろうとする直接的な斗いはもちろん、その国家権力の弾圧による犠牲者を救援しようとする組織的な力が必要なのが明らかとなってきます。それは単に裁判の時の弁護団ではとどたりません。弾圧はあらゆる社会をつかって、あらゆる方法で襲いかかってくるのですから。そして我々人民のまずもってなすべきことは、一人一人の人間が、そのなしうるかぎりの方法で救援組織と手をつないでいくこと――あなたの小さな力、私の小さな力が人間的なつながりをもって、非人間な弾圧に対

抗していく――そういうかんたんなことから始めなければなりません。こうすることにより、憲法12条の「国民はその権利を守るため不断の努力をしなければならない」ということを実践していこうではありませんか。

救援連絡センターは次のような基本的立場を明らかにしています。

一、国家権力による全人民への弾圧とみなす。

一、国家権力によるただ一人の人民に対する基本的人権の侵害を許さない。

一、国家権力による弾圧に対しては、犠牲者の思想的信条、政治的見解のいかんを問わず、これを救援する。

我々「信濃町救対」は10月10日、べ平連主催のデモに集った、斗うカトリック、プロテスタントの市民、労仂者、学生を中心とする集合の中から生まれたものです。我々はその時、十字架の旗をかかげた多くの反戦活動グループをお互いに発見し、あらゆるところでなりひびく正義の声を確認しました。ところがその日、赤坂付近でいきなり私服警官数人がとびこんできて、我々の仲間を一人連れ去りました。この無力なデモ！ただ声をあげて空しく「安保粉砕」と叫んでいることしか知らない我々をすら官憲は弾圧してくるのです。――我々はこうしてただなんとなく、お互いに十字架の旗を持っているといって喜んでいたのでは絶対だめなことがわかりました。本当の団結、本当の力、決して自己満足に陥ることなく、更に力をたかめてゆくそんな斗い。そして我々はなおも斗い続けねばならないのです。こうして国家権力の狂気の弾圧からひきだされた必然的帰結として、我々の救対は組織されました。

この11月16、17日佐ト訪米阻止斗争には多くの斗うキリスト者の仲間が、権力によって不当タイホされました。そして、救対は早速、活動を行っています。

現在、我々はキリスト者の斗争連絡センターを指向しているだけではなく、統一救対、救援連絡センターとも接触し、地区救対としての活動も行なっています。(たとえば四谷署等への差し入れは統一救対の指示に従って我々が行なう。)すべての市民、すべての人権を守ろうとする人々に向かってよびかけます。我々の活動に参加してください。あなた自身が責任のとれる力を最大限のばしていこうとする方法で参加してください。多くの仲間と、多大なる力とパを期待しております。